

原点に立ち返り、将来を見据える

株式会社 堀澄 堀田 澄雄さん、堀田 澄子さん
堀田 真澄さん、細谷 佳澄さん

当社は家具の卸売業として昭和27年に創業し、今年で70周年を迎えました。10年前に業態を変え、現在は、レンタルスペース「ギャラリー animo」や、ファッション&アートブランド「Christal ART」等の事業を行っています。

そのほか、子どもの居場所づくり事業や、荒川こぼん体操への会場提供等もを行っています。

◇ ◇

コロナ禍では、行事やイベントが中止になったことで、お客様や地域の方々とは直接会って交流する機会が減ってしまいました。ただ、オンラインでの会議やセミナーの機会が増えたので、遠くにお住まいの方とも気軽に話せる等、「地域」の範囲が広がったことは大きな変化だったと思います。

その一方で、人と人が直接つながってご縁が生まれ

る「場所」の存在は、本当に大切なものだ改めて実感しました。

◇ ◇

実は、地域との関わりが増えたのは業態を変えてからなんです。区内の歴史や伝統工芸にも目が向き、また下町ならではの、つながりの強さも感じるようになりました。

街を見回すと、最近ファミリー層の方々や、区外から遊びに来た方が増えた実感があります。それだけ、この辺りが便利で暮らしやすい街になったんだなと思います。

◇ ◇

創業時は戦後復興の時期で、家具業界全体がどんどん大きくなりましたが、今はそういう時代ではありません。コロナ禍は原点に立ち返って考えさせられる時期であり、さまざまなことを見直すきっかけにもなりました。

これからも、地域と密着して新しい形をどんどん試していきながら、100周年を迎えられればいいなと考えています。



生活そのものが楽しい街へ

梅の湯 栗田 尚史さん

「梅の湯」は、昭和26年に祖父が開業したのですが、10年ほど前に私が三代目として引き継いだ後、平成28年に建物をリニューアルして現在の形になりました。

コロナ禍では、幸いなことに大きな影響はなく営業できていましたが、やはり「人が集まる場所」なので、足が遠のいてしまったお客様もいらっしゃいました。

一方で、遠出ができない中での、「近場で気分転換ができる場

所」としての役割を担えたという実感もありました。近所を散歩する人が増えたようにも思うので、これまで気付かなかった地域のいいところや楽しめる場所を発見する機会になったのではないのでしょうか。

◇ ◇

もう1年以上前になりますが、アルコール消毒液が品薄だったコロナ禍の初期のころには、せっけんを使って手洗いをするの効果をお客様に伝えたり、子どもたちにせっけんを配って手洗いを推奨するイベントを企画したり、といったことに取り組みしました。

ほかにも、食事をテイクアウトできるお店等を紹介する新聞を作ったりと、地域全体で少しでも楽しみながら感染症対策ができるように工夫していました。コ

ロパ禍が落ち着いたら、少しずつ季節のイベントを再開させていきたいですね。あらかわ遊園のリニューアルオープンも間近なので、地域のお店で協力して盛り上げていきたいと思っています。

荒川区は、一度住んでみるとその住みやすさがよくわかる街です。新しいものを取り入れていくことは大事なことです。荒川区ならではの魅力も生かしながら、生活していることそのものが楽しい、という街になってほしいと思います。

地域を見つめて、そして未来へ

さまざまな人が出会う「交差点」のようなコミュニティを目指して

COSA ON 渡辺 功一さん

「COSA ON」は城北信用金庫が運営する創業支援施設で、NPOが運営するカフェが一体となっています。建物の工事やカフェの運営等、どれも区内の企業やNPOで行っているの、まさに「オールあらかわ」と呼べる施設です。

私は施設の立ち上げから関わっており、主に、入居者である創業者の方のソフト面の支援を行っています。たとえば、内覧の

案内から入居の手続き、毎月の勉強会の開催や、時には人生相談のようなことまで行っています。

コロナ禍では、お客様等と直接会ってお話をする機会が減ってしまったことが残念ですね。オンライン会議ではなかなか雑談もできず、必要最低限のお話になってしまいますし。一方で、遠くの地域の方と関わりやすくなったことは一つのメリットだったかなと感じます。

◇ ◇

カフェには、若者から高齢者まで幅広い方に来ていただいて、コロナ禍でも地域の交流の場になっていました。

COSA ONもカフェも、地元を盛り上げたいという気持ちは一緒なので、施設名の由来でもある「交差点」のようなコミュニティとして育てていきたいと思っています。

荒川区の皆さんは、親しみやすくして飾らない人が多



コロナ禍の始まりから、およそ2年が経過しました。この間、生活だけではなく、街やコミュニティにも、さまざまな変化がありました。

今号では、地域を見つめ、

さまざまな取り組みを行ってきた方々に、街の変化や区への思いについてお聞きしました。

【問合せ】広報課広報係 ☎内線2132

「西日暮里スクランブル

」は、JR西日暮里駅に隣接している、カレー店や立ち飲み屋、書店等が集まった施設です。令和元年12月にオープンしたのですが、その直後にコロナ禍に見舞われてしまいました。

駅の利用者が減ってしまう等で、施設への影響もありましたが、家族連れの方や近所で新しいお店を開拓しようという方が以前よりも増えて、新たなお客様と出会うこともできました。

◇ ◇

コロナ禍の初期には、地域の飲食店有志10店舗で食事の宅配を行う、「谷根千宅配便」という取り組みを行いました。お届けの際に手紙や差し入れをいただくこともあり、「注文することでお店を支援したい」という地域

ピンチのときこそ、力を合わせて

西日暮里スクランブル 柳 スルキさん、木下 央さん
田頭 美穂さん

の方々の温かい気持ちを感じました。

不安が募る時期で、心細い思いを皆さんが抱えていたと思うので、食事だけではなく、日々のエネルギーの源もお届けできればいいなという気持ちで取り組みました。

昨年の11月には、近隣のお店等と協力して「西日暮里エキマエビニック」というイベントを開催しました。子どもから大人までみんながこの街を楽しめることを目標に、道路へのチョークアートや紙芝居、野外上映会等を実施しました。準備を進める中でお店同士の関係も深まり、各店がつながるきっかけを作れたことが嬉しかったですね。

こうした取り組みの実現は、コロナ禍だからこそでした。自分たちだけではなく、チームになってみんなの力を

合わせなければならぬ、という共通の危機感がありましたから。

◇ ◇

荒川区には、話し好きな人が多いですね。どんな相手でも受け入れてくれたり、素直に興味を持ってくれたり、楽しむことに壁がないという印象です。

街並みにも昔ながらの面影が多く残っていて、とても下町らしいですね。すぐく可能性を感じる街なので、これからもどんどん切り込んでいきたいです。

